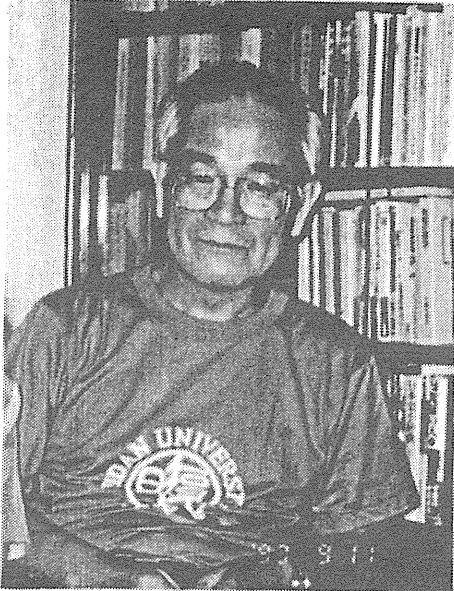


## 海が好きだった

尾崎和子



實はとにかく海が好きだった。

本当は商船学校に入って船乗りになりたかったのだが、視力（強い近視と乱視）のせいで断念したと、聞いたことがある。神戸にある外大を選んだのも、海の匂いに引かれてではなからうか。

泳ぎ方は独特で、海へ着くと決まって一直線に沖に向かって進んでゆき、すぐに姿が見えなくなる。浅い所にいた私と娘たちが、泳ぎ疲れて浜辺に上がり、「パパはどこに行ったんだろう」と少し不安を覚える頃、ようやくゆっくり泳いで戻ってきた。沖合いで、空を見上げてポカリと浮かんでいたのだそうだ。

35年近い結婚生活のなかで、いろんな海を訪れた。二人の親元に近い日本海はもとより、上海や天津の埠頭も思い出深い。鑑真号で帰国した時、飽く事なくデッキに立って波頭を眺め、夜には脚がパンパンに腫れるほどだった。留学中の娘をたずねたサンフランシスコやハワイの海も忘れがたい。三年前、アロハタワーで外国船の出帆を見送ったのが、最後の旅となった。その際撮ったパスポート用の写真を、今度機会をみて、波間に浮かべてあげたいと思っている。思いのままに、世界中の海を旅して行けるように。



尾崎先生のレンズに納められたアモイの海辺

- 「旗人が教えた北京官話 (2)」 『中国語学』147号 1965年
- 「旗人が教えた北京官話 (3)」 『中国語学』148号 1965年
- 「清代北京語の一斑」 『中国語学』156号 1966年
- 「普通話常用詞の変遷——清末・民国時代の語彙と現代語語彙」 『中国語学』170号 1968年
- 「「数量」と「程度」——現代中国語における『很』の用法」 『関西大学文学論集』第28巻  
第3号 1979年
- 「時点と時段——“～点钟”の用法から」 『関西大学中国文学会紀要』第8号 1980年
- 「清代末期における外国文化受容の一斑——時刻法の場合」 『関西大学東西学術研究所所報』  
第32号 1980年
- 「已然と未然——近代中国語における“上”“上頭”の用法から」 『関西大学東西学術研究所  
創立30周年記念論文集』1981年
- 「現代中国語の否定詞“不”と“没(有)”」 『関西大学東西学術研究所所報』第37号 1983年
- 「現実を注視する描き方——老舎の『月牙兒』から」 『関西大学中国文学会紀要』第9号  
1985年
- 「“關於”と“對於”について(その一)——近代中国語の用法から」 『関西大学中国文学会  
紀要』第10号 1989年
- ロブシャイドの『英華字典』をめぐる 『関西大学東西学術研究所所報』第48号 1989年
- 「ゴンサルベスの『洋漢合字彙』(1831年)——ポルトガル人がまなんだ中国語について」  
『関西大学東西学術研究所所報』第50号 1990年
- 『官話指南』をめぐる——明治期日中文化交渉史の一側面 『関西大学東西学術研究所所報』  
第52号 1991年
- 「清代末期におけるパンの受容度」 『関西大学文学論集』第40巻第3号 1991年(後『文化  
事象としての中国』関西大学出版部 2001年に収録)
- 「“怎麼”について——方法・手段と原因・理由の用法から」 『関西大学文学論集文学部創設  
100周年記念』
- 「パンと中国人」 『関西大学東西学術研究所所報』第55号 1992年
- 「老舎の小説における“為是”の用法」 『関西大学文学論集』第41巻第4号 1992年
- 「近代中国における時間の表わしかた」 『泊園』第31号 1992年
- 「『官話類編』所収方言詞対照表」(未刊、本号参照)
- 『語言自遷集語彙索引』(初稿、未刊)

## 尾崎實先生のこと

内田慶市

その知らせを受けたのは、2月13日の夜10時頃だったと思う。

その日の午後の便で、ロンドンから成田を経由して伊丹に降り立ち、自宅に戻って荷物の整理を始めたばかりの時であった。

「尾崎先生が亡くなられた」という萩野先生からのお電話を受け、思わず言葉を失った私は、それでもその時は何故か涙は出なかった。どこかで、この日の来るのを覚悟していたからだろうと思う。そして、先生は僕の帰りを待ってから逝かれたのだと今も思っている。

実はロンドンを離れる前日の夜には塩山君と、出発の何時間か前にも、沈先生と塩山君とで、尾崎先生の話をしていたのであった。「尾崎先生は今頃どうしていらっしゃるかな？」と。また、今回のロンドン行き当初の予定では、沈先生や塩山君と同じ日程で、16日に帰国するはずであったが、卒論の口頭試問等のこともあり、私だけが先に帰国するように変更してあったのである。「虫の知らせ」とはこのことかも知れない。

先生とは大学院の先輩後輩の関係であり、その後は同僚という関係になったが、私にとって尾崎先生は、一人の師と呼んでもいいだろう。それも今の私の研究に極めて大きな影響を与えた師の一人なのだ。

西川先生も書いておられるが、私も先生と直接お話しをするようになったのは、大阪の民間中国語講習会「愚公会」であったと思う。毎週土曜日の午後から開かれた講師学習会には、香坂先生を中心に、上野恵司さん、佐藤晴彦さん、荒川清秀さんなど市大の先輩方が沢山集まり、作品講読や教授法などについて熱い議論が行われていたのであるが、そこに、尾崎先生もいつも来られていたわけである。

先生は、口数こそ少なかったが、その発言には「重み」があった。香坂先生が最も信頼をおかれていたのが恐らくは尾崎先生であったと思う。だからこそ、『中国語学』の「旗人が教えた北京官話」の(2)以降の執筆を任せられたのだと思うし、「近世語研究会」や「中国語検定協会」を起こされる時にも、必ず、尾崎先生をその中心メンバーに据えられたのである。私が、よく香坂先生に、「先生、あの本貸して下さい」とお願いすると、ほとんどの場合、「内田君、あの本は、尾崎君に貸してあるから、尾崎君に言って貸してもらいなさい」と言われたものである。

終わりに付した「主要論文リスト」を見ればわかるように、先生は決してご自分の研究されていることを次々と世に問うという形はとられなかった。むしろ、ご自分の研究をお一人で楽しまれるという感じの方であったと思う。私が、ある人の学問研究の高さは必ずしもその業績では測れないと確信できる理由の一つには先生の存在があるのだ。

もちろん、『語言自邇集』や『官話類編』に関する先駆的なお仕事や、「清代北京語」や『紅樓夢』の「時計」に関する論文、「時間と時量」に関する論文、最後の論文となった「パンの受容度」の論文など形として残されたものはあるのだが、その背後に隠された先生のすさまじい「蓄積」に私はただただ感服し、そこから多くのものを学んできたのである。

この10年来、「西学東漸」と言語文化接触の研究が盛んになってきたが、今私たちが扱っているような資料（中国語はもちろんだが、英語、フランス語、ポルトガル語、ラテン語などの文献）を先生はもう何十年も前からひそかに取り扱ってこられたのである。遅れてきた私は、先生からそれらのことを先生との何気ない会話の中から何度も何度も教えて頂いた。先生とお話ししていると毎回、何らかのヒントが得られたものである。

「それはな、コルディエを見ろ」「あれはな、ドーリットルに書いてある」というように、モリソン、ウェード、ワイリー、エドキンズ、ドーリットル、ロブシャイド、マティア、ゴンサルベス、コルディエ、方豪……。これらの人々の名前を何度先生からお聞きしたことだろう。特に、先生はご自分では語られなかったが、「時計」に関する論文などを読むと、方豪のものから多くを学ばれたのだと思われる。いや、まさに、「現代の方豪」と呼んでもいいのかも知れない。ゴンサルベスの『洋漢合字彙』に注目されたのも、尾崎先生が恐らく最初であるし、『官話類編』や『語言自邇集』についても然りである。最近、「19世紀の北京語」という副題付きで活字本となった『語言自邇集』（北京大学出版社 2002）をもし先生がご覧になったら、なんとおっしゃられたか。きっと「アホ」の一言で片づけられたはずである。

先生は、中国語と英語はもちろんだが、多分、ポルトガル語、フランス語、ラテン語も読めていたふしがある。でなければ、あれだけのことをご存知のはずがない。とりわけ、英語の読みの速さは凄かった。

もう10年も前になるが、上海の復旦大学で一ヶ月間先生とご一緒した時は実に楽しかった。二人で、毎日、古本屋三昧である。ただ、お互いの蒐集の範囲が重なるために、一緒には行かない。そして、宿舎に戻ると、お互いの収穫を見せあったものである。私が『華英音韻字典集成』を買ってきた時は、「一晚貸して」と言われ、次の日までは、その英文の序文と、嚴復の中国語序文を全部読んでしまわれているのだ。その確かな語学力に私は「この人には勝てない」と思ったものである。

先生の書かれたものを読んだり、口頭発表を聞いたりした時の、あの「わくわく」する気持ちは一体なんなのだろうかと思う時がある。『您にかかわるいろいろなことがら』（近世

語研究会」での口頭発表)や『古新聖經問答』とポアロの『古新聖經』の関係を論じたもの(東西研と接触研での口頭発表)「近代中国における時間の表し方」(泊園での講演記録)などは、まさにポーの推理小説を読んでいるような錯覚さえ覚えるものである。それは、単なる「言語現象」を記述するだけでなく、「文化事象としての言語」を取り扱っているからであり、「言語」の背景にある、民族の歴史、思惟方法等を併せて論じているからだろうと思う。それに加えて、現代語、近代語、古典語、ヨーロッパ諸語の蓄積である。まさに「中国学」そのものなのである。

それにしても、やはり先生には後学のために、何としてもご自分のこれまでの研究をもっともって残しておいて頂きたかった。きっと先生ご自身もそれを望んでおられたはずである。しかし、天は非情である。

先生を語る時、必ず「お酒」が話題にあがることは承知している。でも、私はあの病気に酒が一番良くないことを先生は誰よりもよくご存知であったと思う。それでも飲まないわけにはいかなかったのだ。それくらい「しんどかった」のだと私は思っている。それは同じ病気を患ったものにはかわかならない「しんどさ」なのである。それでも、やはり「遅れて来るもの」のためにもう少しだけ頑張って控えて欲しかったと残念でならないのである。

「あんた、うちに来ない？」という電話で、私の新しい人生は始まったような気がしている。あの電話がなければ、今頃は福井に埋もれていたかも知れないとさえ思っている。もちろん、それまでも、今の研究に興味は持っていたが、やはり私の今の本格的な研究は、そこから始まったのである。

実は先生から頼まれていたことが二つある。一つは、学位を取ること、もう一つは、某出版社から私が学生時代からすでに出版予定に上がっていた『中国語の表現法』を書き上げることである。前者は、私の世界観として今でも抵抗はあるのだが、一応、約束は果たした。残りの一つは、もう20数年も前に「あんたに、あれを書いて欲しい」と言われたものであるが、なかなか果たせずにいる。先生は一度はポストに投函されようとして、結局、投函せずにそのまま持ち帰ったとおっしゃっていた。先生は、それを、恐らくは世間どこにでもあるような、単なる中国語の現象のみを記述したものにはしたくなかったのだと思う。私には手に余る仕事であるが、でも、いつの日か、それを完成させて先生の墓前に報告したいものだと考えている。

今だから言うが、私の学位請求論文の最後に収めた論文は、この日の来ることを覚悟して、そのために書いたものである。そして、その論文はお別れの時に、棺に原稿用紙と共に入れてさせて頂いた。先生に気に入ってもらえたかどうかは自信がない。多分、「あんた、まだよく分かってないな」と言われそうである。確かにそういう部分があるのは事実である。「時の計り方」にしても、まだ十分に理解が出来ない部分があるのである。それでも、研鑽あるのみである。先生の学恩に報いるために。

## 哀悼 尾崎實先生

北岡正子

尾崎實先生、私よりもお若い先生の死を悼むことになろうとは、思ってもみませんでした。

思えば二十数年、同じ教室で御一緒に働きました。そうです。私はともかく、先生には「働いた」と申し上げるのがふさわしい年月でした。学科や大学院の学生の、中国語から専門科目に及ぶ種々の教育、関西大学の教養中国語の教育に、先生は専心されておりました。それだけではなく、文学部執行部や大学の広報委員、また大学院文学研究科長としての職務に、在職中、ほとんど、切れ目なくたずさわっておられました。このような職務を退かれたのは、最後の数年だけでした。まるで、御病氣と引き換えるようにして、辛い「休息」をやむなくされた先生のお姿を、私は見ていることができませんでした。

それでも、三年位前までは、杖をひいて教室にゆかれました。あまり出入りする人もいない土曜日、中文科の合同研究室で腰をかけて休まれる先生と、よくとりとめもない話をしましたね。“皆さんに御迷惑をかけてすまない”というのが、この時の先生の口癖でした。“いいえ、先生はうんと働かれたのですから、その利子も沢山ある筈です。今は利子をお使いになって養生なさればいいのですよ。何も気兼ねはいりません。”というのが、これまた私の決まって口にした科白でした。すると、先生は必ず“おおきに”といわれましたね。ここから“おおきに”といわれているのがわかります。この言葉を聞くと、私の内には泪の雨がさあっと降るのです。それ以上、私に何ができたでしょうか。——辛い思い出です。

でも、今になって、先生の気持ちに一番近づくことができたのは、不要な外套を脱ぎ捨てて素直に心でお話できたのは、この時以外にはなかったと思います。先生と互いに決まり文句をくりかえしていたこの時間は、やはりかけがえのないものであったように思われます。幸せはこんな形で現れることもあるのでしょうか。

人として生きることは、辛く悲しいことです。青春のかがやきもいつかは白秋の露の冷たさにかかります。しかし、命ある限り耐えねばなりません。先生は大好きなお酒を友としてこの人生の長途を歩まれました。先生の大好物がお酒だと知ったのは、ずいぶん後になってからでした。何時でしたか、何かの懇親会の席で、美味しい（と私が思っている）山廃酒の話をしました。先生が、上戸でもない私の知ったかぶりに調子をあわせて耳を傾けて下さったので、すっかり気をよくして、その後、件の山廃酒を証拠の品としてお届けしました。すると、先生からからすみが返ってきました。‘海老鯛’をやってしまったと、すっかり恐縮

したのですが、酒の肴には最高でした。先生が亡くなられてから、お酒をほどほにしなければならぬ御病氣と、何十年もお付き合いされていたことを知り、あの時の私の行為を深く反省したのです。

でも、思うのです、“酒なくてなんの己が桜かな”ではありませんか。好きなお酒が止められなかった先生は、さぞお辛かったことでしょう。お酒は先生にとって‘白玉の齒に沁みとおる秋の夜’ 独り静かに飲むべきものだったに違いありません。素面ではわからない妙なる仙界に遊ばれ、下界の汚れを濯がれていたにちがいありません。それが至福の時であったとすれば、たとえ修羅と隣りあわせであったとしても、よかったですではありませんか。人は所詮、我が身一つに世の重みを背負わなければならないのですから。

先生、今度こそ、本当に仙界にゆかれてしまいましたね。仙界の先生がどうしていらっしゃるかなぞ、とても想像できません。絶対の無、絶対の寂でしょうか。私に分かるのは、この二十数年の先生の働きと、それを支えた先生の陰の心です。飛行雲のように鮮やかな線をえがいて、私の空に残っています。

尾崎實先生、どうぞ、ゆっくりお休み下さい。

## 尾崎先生を偲んで

西川和男

私が尾崎先生に最初にお会いしたのは、きっと愚公会であったと思う。愚公会は今ではもうなくなっているが、当時は大阪を代表する民間中国語講習会で、香坂順一先生が主宰されていた。当然、大阪市大の方々が中心で、研究会や学習発表会も頻繁に行われていた。私もその集まりに時々お邪魔し、いろいろ勉強させていただいた。その勉強会に尾崎先生もよく来られ、私にとっては非常に難しかったことを、他の先生や市大の院生らと、議論されていた。あまり言葉数が多い先生ではないので、私には余計わかりにくかったが、尾崎先生が何か仰ると、他の方々は必ず尾崎先生の意見を尊重されていたように思う。院生にとっては、頼りになる先輩のような存在だった。

そうこうするうち、私も講師の仲間入りをさせていただくようになり、尾崎先生に親しくしていただくようになった。いまでもよく思い出すのは、講習会宣伝の為に、愚公会事務局（大阪第1ビル）周辺の電信柱に、みんなでビラ貼りをしたことである。そのとき、尾崎先生も来られ、みんなに指示しながら、自らもビラ貼りをされていた。貼りながら、尾崎先生

からいろいろなお話を聞かせていただいた。その時から、尾崎先生はお酒が好きで、論文を書くときには必ず傍らにはお酒があるんだ、と院生の方々から聞いていた。そのお酒が大病の引き金になろうとは、想像もしていなかった。

関西大学に來られてから、ますます親しくしていただき、私のこともいろいろ心配していただいた。先生は関大をこよなく愛され、先生から「関大の院生・卒業生の就職に少しでも役立つように、高槻西武百貨店で中国語講座を開くので手伝え」と言われ、また「君の後の講師も必ず関大から選ぶ。」とも言われた。その時、私は、この先生は本当に関大のことを考えて下さっていると思った。

この関大を思う気持ちは、学生にも伝わり、学生から「ザッキー」と命名されておられたこともあった。

このような先生が、大好きなお酒が引き金となり、定年を待たずに永眠された。よく叱られたあの独特の「バーカ」「アホ」が、一生耳からはなれない。

安らかに眠られんことをこころからお祈り申し上げます。

### 尾崎實先生の学問とお人柄

佐藤 晴彦

尾崎實先生が亡くなられた。享年 65 歳という若さで。

ただ私には「尾崎實先生」と呼ぶのは却ってよそよそしくまた空々しく感じられるので、日頃の「尾崎さん」という呼び方で話を続けたい。

尾崎さんの論文といえば、「<～于>構造について」や「魯迅の言語」などを思い出すが、尾崎さんの研究で私が最初に惹かれたのは Mateer の『官話類篇』についての研究であった。今でこそ『官話類篇』はよく利用されるが、当時は尾崎さんの研究が一番進んでいたと思う。周知の通り『官話類篇』は中国語の語彙で南北間の対立がある場合、右到北京官話を、左に南京官話を並記してある。時として三行になっているところがある。そのまん中は山東方言だというのである。

尾崎さんはこの南北の言語差を示している資料を利用するのにあたり、北京官話を中心とした語彙索引を編集された。普通の語彙索引ならそれでおしまいということになろうが、それは単なる語彙索引ではなかった。そこがまた尾崎さんの尾崎さんたる所以である。『官話類篇』の北京官話を中心に語彙索引を編集されると同時に、その南北差が現在の方言でどこまで合致するかを確認された。具体的には、北方を老舎の小説と比較し、南方を茅盾の小説



で比較し、Mateer の資料がどれだけ信頼性があるかを確認した索引なのである。そうした調査を経て、原本の南北の記述の一部が逆であることもわかった。こうした堅実さと着眼点のユニークさに、私はまず驚き、蒙を啓かれる思いがした。

尾崎さんの論文は何を読んでも面白いが、やはり関西大学に移られてからのものが、私にはより魅力的である。例えば、「時点と時段—「～点鐘」の用法から—」「已然と未然—近代中国語における“上”“上頭”の用法から—」「清代末期におけるパンの受容度」など、いずれも知的な刺激を受け、いろいろ考えさせられたものである。

そのうちでも、私には「已然と未然—近代中国語における“上”“上頭”の用法から」が一番刺激的だった。今読んでもやはり面白い。太田辰夫先生の論文とはまた違った魅力がある。それは単に「言葉」の現象だけでなく、点と点を組み合わせ、それが面に発展し、さらにそれぞれがばらばらでな現象ではなく、深いところでつながりがあることを示してくれる。

原因・理由を表す中国語といえば、“因為 A,所以 B”が想起され、仮定、条件を表す中国語といえば“要是”や“如果”などが想起されるだろう。しかしモンゴル語の影響を受けた漢兒言語では“因～上頭”“因～上”“因此上”というように“上”が使われることが多い。そして私はこれらの表現は漢兒言語だけの用法と思っていた。しかし尾崎論文を読むことで『水滸伝』『紅樓夢』『兒女英雄傳』などの白話小説、『三合語録』など清朝の満漢合璧テキストまで使われ、さらに現代語、それも主として西北の方でもこうした用法があることを教えられ、非常に新鮮に思えた。と同時に自分の視野の狭さを恥じ入り、ややもすると見逃しそうな言語現象を見事にとらえた尾崎さんのこうした鋭い感覚、嗅覚に感服したのであった。

言語現象から出発して考察を進め、文化的背景にも目配りをし、言語現象に止まらず平面的ではなく立体的に示してくれる。尾崎論文の魅力はそこにある。近世中国語は、モンゴル語の影響に代表されるように少数民族の言語の影響を受け、また近代では所謂「欧化語法」という語によって示されるように、ヨーロッパ諸語、とりわけ英語の中国語に対する影響は否定できないであろう。それを指摘することもむろん重要である。しかし尾崎論文はそこが違う。曰く：

「中国の外国文化受容に対する姿勢全般についていえることだが、とくに、ことばの場合、中国語は、外国語からの干渉・影響を、直接に受けることは、非常にめずらしく、例えば、日本語などに比べ、比較にならぬほど、強く抵抗し、中国人にとって、よほど、自然な形にならないかぎり、中国語の中で定着することは難しい。そのため、一旦、定着する方向に向かいつつある、あるいは、もうすでに、定着してしまっているものは、それが、外国語とどのような関係にあったのかを、ハッキリと指摘できなくなっている場合が多い。」

「そうすると、楊聯陞のように、“上”“上頭”は、蒙古語から影響を受けた、とい

う検討抜きの裁断より、あるいは、また、蔡美彪が述べる、蒙古語の語気を伝える、という説より、むしろ、何らかの干渉・影響を受けた結果であるとしても、中国語の方位詞“上”“上頭”に、「ところ」「点」という新しい意味が誕生したことに、注目したい、と思う。」

つまり、「中国語が外国語の影響を受けるのは、そこにそれを受容できる条件があったからだ」というわけである。私は尾崎さんのこうした中国語のとらえ方から、恐らく一番大きな影響を受けたと思う。

尾崎さんは学部を神戸外大で学ばれ、修士課程、博士課程はともに大阪市大で学ばれ、大学院修了と同時に市大の助手に採用された。私は学部と修士を神戸外大で学び、博士課程は大阪市大で学んだ。市大受験の時には尾崎さんからいろいろアドバイスを受けお世話になった。そして偶然尾崎さんが歩まれた後を追うようにして市大の助手に採用され、同じような道を歩んできたこともあってか、ふつうの先輩以上の親しみを感じていた。

尾崎さんと私の初めての出会いは何時だったのだろうか？今それを思い起こしてみると、多分私が学部の四年生の時だったろうと思う。今はもう忘れられてしまっている旧中国語検定協会が主催する戦後初の中国語弁論大会が北九州大学で開催された時のことであった。私も出場者の一人として壇上に立ったことがある。ただその時は尾崎さんが私を神戸外大の学生であるとご存じになっただけで、私が尾崎さんのことを存じあげたわけではなかった。

少し言葉を交わすようになったのはもう少し後のことであった。たしか長田先生の研究会にお見えになった時だったと記憶する。その時も例によってベレー帽を冠られ、これまた例によって REGAL の靴を履いておられた。あの巨体に頑丈そうな REGAL の靴が大変お似合いになり、一種憧れのような気持ちを抱いたものだった。確かその時は毛沢東の言語と林彪の言語を比較されたことがあり、非常によく似た特徴があったという意味のことを話されたと記憶する。そしてお話になりながら、例によって身体全体をゆすっていかにも愉快だというふうによく笑われていた。その姿が今でも臉に焼き付いている。そして怖じ気付いて何も喋れないでいる私に「遠慮せんと何でも言わな損やで」と声をかけられた。私が初めて尾崎さんと交わした言葉は確かそんな内容だったと思う。それ以来のおつき合いである。尾崎さんが大阪市大の助手、私が神戸外大の院生だったころの話である。

尾崎さんは難しい顔をしておられるから一見非常にとっつきにくそうに見られがちである。いわゆる「煙たい」印象を与えることがままあるようだった。しかし親しくしていただくようになるとその独特のジョークに思わず笑ってしまう。人を笑わせておいてご自身もあの大きな身体全体をゆするようにして大笑いされるのである。日頃学生に対しても非常に丁寧な言葉を遣われていた。ある時、市大の院生の一人に「あなた…」と語りかけられた。その院生も尾崎さんのまありにも丁寧な言葉遣いに、気後れしたのか「『あなた』って誰ですか？」と半分冗談まじりに返答した。すると尾崎さんはすかさず「お前や！」ときた。万事この調

子で、その場その場での言葉の使い方が非常に面白かった。

一方、何事にも非常に真面目に取り組まれるから、怖がられることもあった。こんな話がある。『水滸伝』の研究で有名だった胡竹安先生を、尾崎さんが責任者で関西大学に招聘された時のこと。責任者である尾崎さんに断りもなく胡先生をつれまわそうとした人物がおり、それを知った尾崎さんが猛烈に怒られた。「関大が責任もって招聘しているのだから、勝手な真似をされては困る」というのがその理由であった。それ以来そのご仁は尾崎さんを恐れてよう近づかなくなったということである。そういう意味では「怖い」存在という印象を与えたであろうが、私にとっては何時も優しい先輩であった。

尾崎さんの中国語に関する語感の鋭さということでは、こんなことがあった。1968年にかの『小額』が『横浜市立大学紀要』に発表された頃、尾崎さんがそれをご覧になり、「ベタベタの北京語やな。Taitian やったら、これ、舌なめずりしながら読んどるやろうな。」とポツリと一言もらされた。私はその言葉の中に尾崎さんの太田先生に対する畏敬の念、親密さの念、ライバル意識、学問の理解度を感じると同時に尾崎さんの北京語に対する理解の深さを感じとり、感動を覚えたものだった。

2年前、私が「近代東西言語文化接触研究会」で「『中国語歴史文法』解体」という気を街ったようなタイトルで口頭発表した時、場所が関西大学であった関係から、ばったり尾崎さんにお会した。その時尾崎さんは私の発表タイトルをご覧になり、「そう、あれは潰さないかん」という意味のことを仰った。ただ残念ながら私が発表した時は尾崎さんには授業があった関係で、発表を聞いていただけなかったのであるが、自分の発表を一番聞いて欲しく思い、同時にご意見を伺いたかったのは、やはり尾崎さんだった。それができなかったことをいまだに残念に思う。

尾崎さんは日本人研究者の中で、欧文資料を一番よく読まれ、理解されておられたのではないかと思う。ただここ数年は体調をくずされ、思いのままの研究が進まなかったと思う。従ってせっかく貯め込まれた欧文資料であるが、それを十分に開陳されないまま他界される結果となった。そのことが残念でならない。むしろ一番残念に思っておられるのは当のご本人であろうが。そうした豊かな知的財産をもたれていたにもかかわらず、自らの命を縮められたのは、たぶんお酒であろう。豊かな才能に恵まれていながら、尾崎さんが何故あそこまでお酒にのめり込まれたのか？何がそんなに尾崎さんを追い詰めたのか？お酒に何を求められたのだろうか？どう考えても私にはわからない。

わたしは尾崎さんにはたくさん借りがあるように思います。そして、その借りを少しでもかえさねばと思っているうちに、尾崎さんはあっというまに逝ってしまったのです。

尾崎さんにはよく飲み連れに連れてってもらいました。尾崎さんは、わたしにとってまるでお兄さんのような存在で、東洋史専攻だったわたしが中文専攻に変わり、学部から院にすすんでも、わたしは何かあるとすぐ尾崎さんに相談したものです。尾崎さんは最初市大の助手で、そのあと関大に移る前の何年かは、他の大学で苦勞されていたように思います。そうした忙しい時に、尾崎さんはよく時間を割いてわたしの話につきあってくれました。相談といっても、主に中国語の問題についての話だったと思います。尾崎さんはよくわたしを吹田駅の近くの飲み屋に連れて行ってくれ、そこで一杯傾けながら、話を聞いてくれました。あるいは、ああしたことも尾崎さんの体をむしばむ遠因になっていたかもしれません。今思うと、ごちそうになりっぱなしで、一度もおごりかえせなかったことは残念です。

尾崎さんには読書会でもお世話になりました。学部時代、市大の中文専攻はよく合宿をしました。一度、福井の山奥の小学校を借り切ったことがありました。午前中の3時間は『阿Q正伝』を読む時間で、香坂先生が光生館から出す予定の注釈本の原稿を用意しての読書会でした。午後はグループに分かれるのですが、わたしたちは尾崎さんが日頃から主催する読書会の延長で、『智取威虎山』という当時の革命現代京劇の脚本を読んでもらっていました。わたしたちが質問すると、尾崎さんは、よく質問してくれたといわんばかりに中国語の魅力を滔々と語ってくれたものでした。本をきちんと読むということは香坂先生や尾崎さんから習ったものです。

尾崎さんには、こうした学恩ばかりでなく、私的にも大きな借りがあります。それは、わたしが金沢出身の妻との結婚を決意し、相手の親に結婚のお願いに行く際、尾崎さんにいわば「保証人」として同道してもらったことです。尾崎さんが金沢とゆかりがある人間であるということとも関係していたかもしれません。それから、まもなく25年を迎えようとしていますが、お宅に挨拶にお邪魔したのは、つい先日、尾崎さんがなくなってからのことでした。本当に不義理なことだと思っています。

もう一つ、尾崎さんの好意を無にしたことがあります。それは、勤務校で欠員が出て人事を進めているときのことです。愛知大学の『中日大辞典』を継承発展してくれる人材ということで、わたしの中ではほぼ意中の人がありました。そうしたある夜、尾崎さんから電話がかかってきました。多少酔いが混じっていたと思います。「あんたなあ、あいつ取るつもりやる。言うとかけど、あいつを取るのは絶対やめとけ」尾崎さんにしては珍しく激しい口調に満ちていました。しかし、どうも酔っぱらってかけてきていることだし、と高をくくったわ

たしはその忠告を無視してしまったのです。もちろん、人事はわたし1人で決めることのできるものではありませんが、あとになって思うと、この忠告を聞かなかったことが、採用後の数年、わたしばかりかまわりの者までさんざん苦勞させられる原因になったのです。尾崎さんはその人のことを直接知らないと思っていたのですが、実は、本の貸し借りを巡って、かなりいやな思いをされていたようでした。あるいは、尾崎さんの人間評価の直感と言うべきものだったかも知れません。こいつは信用できる、こいつは信用できない、こいつはいいやつだ、こいつはいやなやつだ、そういうことを尾崎さんはよくおっしゃっていたような気がします。このお詫びも結局しないうちに、尾崎さんは逝ってしまいました。

### 悼念尾崎实先生

周振鹤

尾崎实先生不过长我几岁，却突然离我们而去了，这实在给我太大的震动。记得我刚读研究生时，我的老师谭其骧先生有一次跟我们说，他五十多岁时，一个好友，宋史专家聂崇岐先生忽然去世了，也给他很大的震动，从此以后才想到，原来人五十多岁也可能归西的，非要抓紧时间不可。谭先生是活到八十岁出头才仙逝的，但于一个饱学硕儒而言，八十岁也是太短的寿命，谭先生脑子里的学问还有许多根本来不及写出来，都只能随之而去了。所以我有时在一些场合说，一个学者真该像猫一样，有九条命才好。我知道尾崎先生也有许多学问来不及阐述行世，就与世长辞了，让人感到心酸。

我与尾崎先生接触不算太多，但他却是我比较早就认识的日本学者。因为上一世纪八十年代我与游汝杰兄合作了《方言与中国文化》一书，里头有语言接触一章，所以他来复旦大学访问的时候，我们就有了比较多的共同语言。他曾送给我一些他的研究论文，给我留下很深刻的印象，深深地觉察到他是一个能够做绵密精致考证的专家。尤其是关于 pao 一词在日本的传播演变过程，在他的考证下，不但让我们觉得韵味无穷，而且也让我在学问的追求上有自叹不如的感觉。

尾崎先生还有一个很值得称赞的嗜好，那就是搜集稀见的语言接触关系的书籍，据说他在这方面的收藏是很丰富的，但由于我去关西方面的机会较少，竟没有机会欣赏这一收藏，也是至今引以为憾的事。

一个学者的生命毕竟是有限的，但必须研究的学术问题又是无涯的，在学术的领域里同样也有着与战场上一样前赴后继的现象。逝者已去不复还，生者唯有更努力。好在以内田庆市与沈国威先生为代表的研究团组在语言接触方面已经取得很大成绩，而且还在以更大的势头向前进，我想这就是对尾崎先生在天之灵的最好的安慰。

## 尾崎先生の思い出——ご自宅での授業

塩山正純

ロンドンに資料収集で滞在中、ひとあし先に帰られた内田先生からのメールで、尾崎實先生がお亡くなりになったと知ったときは、あまりにも突然で、俄かには信じられずことばがありませんでした。帰国後、遅ればせながらお別れのご挨拶に伺い、遺影に手を合わせていたときも、まだ目の前で叱咤激励して下さっているように思いました。

多くの皆さんに尾崎先生のお人柄を少しでも知っていただけたらと思い、先生のご自宅での授業のことを紹介したいと思います。私が尾崎先生に直接教わったのは博士課程に入ってからです。当時すでにあまりご無理がきかなくなっていたこともあって、同級の史彤嵐さんとふたり、毎週末、土曜の午後に高槻のご自宅に伺うようになり、それが授業のかわりでした。ほどなくして、専攻する分野のこともあって、私がひとりで伺うことが多くなりましたが、毎週、午後の一時ごろ玄関のベルを押すと、いつも「よう来たな」と迎えてくださって、それから居間でお茶やお菓子をいただきながら、時間のたつのも忘れて日が暮れるまで、いろんなお話を伺ったり、聞いていただいたりしました。入院中は病院の待合室が即席の教室になったりもしました。

先生の自宅での授業は私自身ほかには無くて、あとにもさきにもこれ切りですが、まだ院生も少なくそういうことが可能なきっかけだったのでしょう。本当に貴重な経験となりました。先生の師である増田渉、太田辰夫、香坂順一の各先生の思い出話や研究のお話は何度も何度も聞きました。こどもの頃の思い出もよくお話になられました。そして、ことのほか本に関するお話がお好きでした。私も自分なりに面白い本が手に入ったら持参しましたが、先生にしてみればもうすでにお持ちであったり読まれたりしたもので、喜んで眺めながら、お返しに貴重な蔵書を紹介してくれたりしました。「こんな本を読みました」というような話をすれば、「私が思うにこの本のポイントはなあ……」から始まって、どんどん会話が弾みました。「いまこんなテーマに関心があります」というような話をすれば、やおら席を立たれて、家中の何処から古い本を出して来られて「それにはこういう資料やな」、「ここには、こんなことを書いてあるのや」と楽しそうに教えてくださいました。こんな風な会話が延々と続いたものでした。

先生は、若いころは世間で何が起きているのかも知らなかったくらい、中国語の資料をひたすら読む毎日だったそうです。そういう時代があつてのあの膨大な知識であつたと思ひ

ます。そのうえで先生はよくこうも仰いました。「研究者として、1つのテーマを深く追究することは大切です。しかし同時に、散漫になってしまう危険があるにしても、いろんなことに興味を持たないといけません。そして、それは自分で専門に決めた研究にだけ留まっていたはいけないということです。他所の学問を見なさい。そして、お芝居も観なさい、音楽も聴きなさい、絵も観なさい、旅もしなさい、本も読みなさい。いろんな芸術に親しんで、感性を磨かんといかんのです。こういうものは研究と矛盾するものではないのです。研究には、感性が必要なのです。「間」が大事なのです。「間」はお芝居でも、研究でも、ありとあらゆるものに共通します。年をとって気づいたときにはもう感性は磨けませんし、「間」は身につけません。もう遅いのです。これができるのは若いうちです。いろんなものをみなさい、ききなさい。」これは私にとって非常に印象深い言葉でしたし、いまでも私のこころの大きな拠りどころとなっています。

また、先生は生前、「私の身体がもっと言うことを聞いたら、毎日研究室に出て、研究室を学問のサロンにして、若い院生たちに開放して、学問を熱く自由に語りあえる場にしたらかった」と常々仰ってました。私が先生のご自宅で経験したようなことを、大学の研究室でなさりたかったのです。それがかなわなかったことは残念でなりませんが、「研究者としての感性を磨き」「学問を熱く語りあう」ことは、私たちこれからの世代が常に心がけていかねばならないことだと思います。

## 尾崎實先生のこと

奥村佳代子

わたしにとっては、尾崎先生は、中国語の扉を開いてくださった先生である。

1992年、たしか、教員免許取得のための必要単位として、尾崎先生の「中国文学作品研究」を受講したのだった。白話で書かれた『聊齋志異』の「瑞雲」を読んだ。当時、国文学科の学生だったわたしにとっては、初めて接する文体だった。何かのきっかけで、大学を一年休学し中国へ留学したことをお話しして以来、先生はわたしをご指名になるときには、「中国の、友だち」とお呼びになった。こんな先生のユーモアも手伝って、毎週の授業がとても楽しみだった。自分なりの訳を用意して、先生から何らかのご意見をいただけるのを期待していたものである。実際には、一字一句を見逃さない精読を旨としておられた先生の授業なので、わたしの読みは雑であり、この語にはそんな意味もあったのか、と発見の連続だった。

そのころ、わたしは大学院に進み、中国語を本格的に学びたいという思いを抱き始めていた。今ではそんな心配は無用だったと思うが、国文の学生が中文の大学院を受験しても良い

のだろうか、と不安だった。

初夏のある日、授業を終え、尾崎先生は文学部の中庭を通ってお帰りになるところだった。どンドン歩いて行かれる先生を追いかけて、大学院で中国語を学びたいと思っています、とお伝えした。すると、わたしの不安をよそに、まるで当然であるかのように、先生は中文の大学院の試験についてご説明くださった。「江南書院の『中国語学事典』を見てご覧なさい。文学史の問題も出るから前野直淋の『中国文学史』を読みなさい」

慌てて手持ちの紙にメモしようとする、「それじゃ書きにくからう」と、先生はちょうど携えておられたハードカバーを差し出してくださった。今から思えば何か大事なご本だったのではないだろうか。わたしは遠慮もせずに取り、台がわりにして、書名を書き留めた。

学舎の白い壁、新緑の木々、ふりそそぐ初夏の明るい日差し。その日のその瞬間は、穏やかな光の中の情景として、記憶に残っている。

こうして、わたしは無事、中文の大学院生となった。

大学院に入ってからわたしは、だんだんと尾崎先生とは疎遠になっていった。先生のお思になるほどには勉強しない学生だったからだと思う。最近になって、少し勉強し始めたころ、再び先生と中国や中国語のこと、図書館のことなどをおしゃべりするようになった。わたしの知らないことばかりで、溢れでる言葉に圧倒されたが、わくわくしながら耳を傾けずにはいられなかった。先生のお話は必ず知的な興奮を与えてくれたので、その後は自然と図書館へ足が向いた。

いつかは「最近はまだまあ良く勉強するようになった」と見直してもらいたい、と欲していたのに、とうとう果たせなかった。「果たすことができなかったのだ」と悔いたことを、いつまでも忘れずにいようと思う。

## 尾崎先生の思い出

西山美智江

尾崎先生の第一印象はユーモアのセンスある優しいかたであった。修士を受験するために望んだ面接で、はじめてお目にかかる関大の先生方を前にわたしはかなり緊張していた。面接ではまず中国語を朗読する。そのときは『ことばの旅』第9課“大拇指和小拇指”が課題として示された。わたしの発音からかなり緊張している様子が伝わったのだろう。読み終わると尾崎先生が突然“大拇指”とは何か“小拇指”とは何か質問された。とっさにわたしは自分の指を2本伸ばした。すると今度はそれは何か質問された。見ればわたしの手は数字の6を表していた。「6 (liu)！」と答えると、他の先生方の笑いも誘い、わたしの緊張はすい



ふんと和らいだ。

修士の授業に参加してみると、尾崎先生は学生にとって厳しく怖い先生であった。先生はあまり多くを語らないが、1字1句おろそかにしない訳を求められ、常に緊張を強いられた。資料としては『官話類編』や『聖諭広訓』、聖書などを読んだ。参加する院生の多くはハイ・レベルな講義についていけず、なんとか世間話の時間を伸ばそうと必死だった。そこで気づいたことは尾崎先生が食通というか、かなり食いしん坊なただということだった。あるとき先生の口から神戸の『老祥記』の豚まんの名前がでた。神戸在住の友人とわたしは、その言葉を聞き逃さず、さっそく次の授業には豚まんを携え参加した。まさか本当にそんなものを持ってくる学生がいるとは思ってもよらなかった先生は、大笑いされた。それからどうやって暖めようか大騒ぎしている内に授業の半分近くが過ぎ、我々の引き延ばし作戦は成功を取めた。

修士論文の指導では、尾崎先生は実に気前がよかった。当時発売されたばかりの貴重な「上海官話」の資料である『商界現形記』を修論の題材に勧めて下さったり、修論の書き方の参考にせよとご自分の修論まで見せていただいた。

博士の授業では、あらためて先生の博学さに驚かされた。『語言自邇集』などの宣教師資料から『文明小史』『老残遊記』などの清末小説、はては王安憶のような現代小説まで様々な資料を熟読の上、講義に用いられた。その他にも『辞書研究』という雑誌がおもしろいか、文革期の小説におもしろいものがあるとか、常に勉強されているのだなあと感心させられることばかりだった。そうすると不思議なものでこちらもなにか先生を驚かせるような資料を見つけなければ、と探すようになっていた。

先生が教えた研究者に必要なものは、ねばり強い読みと広範な知識、それと自分で面白いと思えるものを探す嗅覚であったかと思う。また教師に必要なものは、常に新鮮な知識を惜しまずに学生に与えることとユーモアのセンスをもつことであったかと思う。今後も先生の教えを忘れることなく努力してゆきたい。